

環境教育「まず、今できることから」

歴史に学ぶ

発行所：地域環境活性化協議会
 編集者：代表幹事 高橋 賢一
 連絡先：市民活動支援センター
 尾張旭市渋川町三丁目5番地7
 (渋川福祉センター内)
 TEL 0561-51-2878

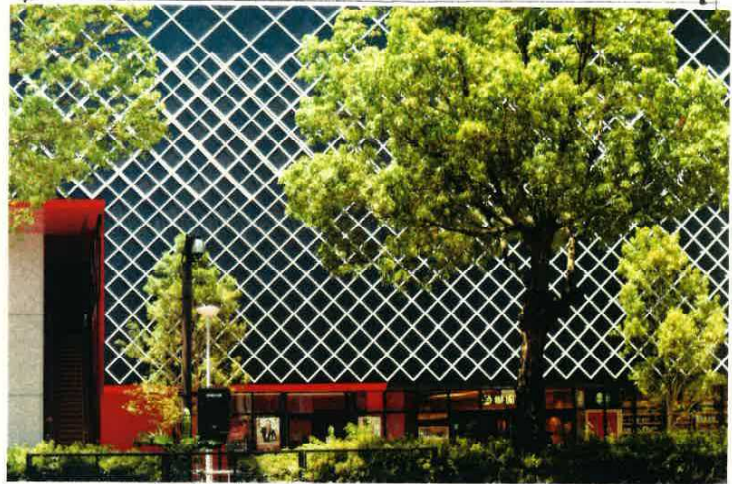


太い木がありがたから取るのは、日本の木造が小怪木直径が、一四センチ未満の細い材木。文化のつたから伊勢神宮のような巨人を使った建築が突出して格好よく見えた。

2019年完成予定の新国立競技場をはじめ、近年木を多用した大規模建築や公共施設が注目を集めている。地よき空間を生み、森林資源の活用にもつながる新しい木造建築が東京や名古屋の街をどのように変えていくのか、いまと未来を探る。

木でつくる。

細い材の機能と太い材の存在感



都市の木を見て山の恩恵を思い出す。都市部で木造を建てる意義は建築というものはもともと近頃の山で生えている木を使って地産地消でつくってしまいたい、狭い地域で考えると、建築の重量と森林資源の供給量はバランスしない。流通機構が発達し都市部でも獲るようになった。これはストレスを感じることも多い都市部だからそれを緩和してくれる木をたえず使うことに意味がある。都市の人に山の大切さをわかそうもいうとう効果もある。山は木を育てるためにあるわけではなくて都市部で利用する。水を貯めるところである。都市の人からクリエーションを採り、保養地でもあり、都市に木があれば、山の恩恵を思い出す。

ふたがけにもなる。アジアの各主要都市ではすでに超高層ビルが建ち、大きな公園もつくられ、日本の都市が生き残り、すくなくには木を用いた適度なスケールのもので都市をつくっていく。他の都市にはない魅力をアピールすることが出来る。日本の都市には木造が合っている。

